

親鸞仏教センター主任研究員定例講座（第Ⅰ期）

『歎異抄』思想の解明

第3回 『歎異抄』という題号

加来 雄之

はじめに

・『歎異抄』は親鸞聖人の言行録でも、浄土真宗の入門書でもない。

・近世の読み方 破邪顕正の書

近代の読み方、信仰の書、「安心第一の書」（清沢満之）……信仰と安心（あんじん）

・私にとっての『歎異抄』思想——親鸞聖人という人格に会いながら思わず、その教えを聴きながら聞くことができていないという私たちの現実を歎き、問い直し、「先師口伝の真信」という事実を回復するための書である。

『歎異抄』を対象として学ぶのではなく、親鸞の名に象徴される伝統に値遇している自己の意味を『歎異抄』に学ぶのである。

・現代の課題と『歎異抄』——「先師口伝之真信」「よきひとのおおせをかぶりて信じる」の回復を課題とする『歎異抄』の思想は、宗教の言説とは何かが明らかになっていない時代にとっての指標となるか——通俗的な宗教のイメージの変革。

『歎異抄』著述の根本関心はなにか。それが、親鸞の教えを受け継ぐことへの深い責任にあることは言をまたない。しかしながら親鸞の教えを受け伝えていくとはどのような事実なのか。

『歎異抄』は文字通りの宗教書である。つまり伝記（懷古）や先師の教え（教義）を伝えることにあるのではなくて、先師の教えを聞くことを実践的に示すことにあると思う。

単なる真宗の教義についての解説書ではない。

単なる親鸞の言行録でもない。

歎異抄という言葉で表現される教学の実践である。

もし師の教えに出会うことが、過去の一つの出来事であるならば、『歎異抄』を言行録の一つとしてみなすこともできる。もし師の教えに出会うことが、師の思想を理解することであるならば、『歎異抄』を真宗教義の解説書としてみなすこともできるであろう。

しかし『歎異抄』においては、師の教えに出会うことを「よき人のおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」という、師の教えを受けとめて生きる主体が生れることとして意味している。

・『歎異抄』は、ただ漠然と信心の抽象的な一般的な問題を扱っているのではない、「同心の行者」とか「一室の行者」の「不審」という表現からもわかるように、親鸞の教えのもとに集う

人々におこっている現実を見つめて、それを「かなしみ」「なくなく筆をそめて」記されている。ともに教えのもとに集うているという一つの厳粛な事実が、傍観したり、単に批判したりすることを許さないのである。

I 「歎異・抄」という題号

(1)「歎異抄」は一部の総標

・『歎異抄』を一部として読む意義。(切り取られた『歎異抄』や『歎異抄』二部作に抗して)
「題は一部の総標」——勝れた書の題は一部の総体をあらわしているという。『歎異抄』という書物ほど、題がその書の性質を明確にあらわしているものも少ないのではないか。この書は、後述に「なづけて歎異抄というべし、外見あるべからず」と語るように、みずから「歎異抄」と「名づくべき」ことをみずから表明している。このことは、それ以外の名にあらわされるような関心でこの書を読んではならないという注意を促していることである。それは換言すれば、それ以外の名においては、この書はまったく違った関心のもとに読まれてしまう危険を持つことを編者が充分に承知していたからであろう。

「『歎異抄』のきわだった特質は、この『歎異抄』という書名について、作者自身が言葉をつくして、そのよって来るゆえんを明らかに記しているところにあります。この一冊の書物は『歎異抄』という書名のほかには、どのような名前もつけることができないという、きわめて明白な精神のもとに書かれたものであるということであります。」(広瀬杲『歎異抄のこころ』(東本願寺)16-17頁。詳細には広瀬杲『歎異抄の諸問題』に論じられている)

この題号、書名は、この一部を貫くものである。佐藤正英氏の「<異義条々>」と「歎異抄」という二部の書物があったという見解は、歎異抄という題号のもとに展開しようとしたこの書の願いを見失わせることになるかもしれない。

・私は「歎異抄」という漢文による題名の由来を示す証文が漢文序ではないかと考える。(漢文序については第4回で取り上げる予定である。)

(2)「歎異」・「抄」—著述と方法

①「歎異」——著述の主題

・「歎」——「歎」という精神の伝統。

親鸞の「悲歎」—「悲しきかな、垢障の凡愚、無際より已来、助・正間雑し、定散心雑するがゆえに、出離その期なし。自ら流転輪回を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし。」(『教行信証』「化身土巻」『聖典』356頁、「愚禿悲歎述懐」(『正像末和讃』『聖典』508頁)

「改」「排」「破」という字との区別。——寺川俊昭『歎異抄の思想的解明』を参考。

・「異」——「異」と「一」

「異」の対義語は、辞書によっても「同」「常」「正」などがあげられているが、『歎異抄』の文脈からいえば「みな信心のことなるよりことおこり、」という「異」に対して「往生の信心においては またくことなることなし たゞひとつなり」(跋)というように「一」であることである。それは「信をひとつにして」(第一〇章)からも明らかである。それに対して、「同」は『歎異抄』のなかでは、「おなじくころさしをして「同心行者」一つということは、同じというだけではなく、同じであってしかも二つないということを表わしている。同じ物が二つあるのではない。ただ一つのことだからである。そのようにいわなければ、異なることを歎くということの意味が深まらないのではないか。『歎異抄』が信心について同じではなく一つという言葉で表現していることに深い配慮を感じる。同じ信心というと、信じている対象(教義・人格)が同じであるという意味にもなる、しかしそうではなく、信が一つなのである。それは心理ではなく真理であるような信でなければならない。

異←→一、同、等、

邪←→正

異義←→無義をもて義とす

邪義←→正義

異なるとは。異義、義に異なるとは。「無義をもって義とす」ということに異なっているのである。このことは第十章において検討される。

②「抄」——著述の方法

「抄」とは、抄録というように抜き書きのことである。漢字としては、さっと斜めにすぐ動作であり、表面を小さくかすめとる意味である。国字としては「ぬきがきの意から転じて注釈書もあらわす」という。

『唯信鈔文意』には

「「鈔」は、すぐれたることをぬきいだし、あるむることばなり。」(『唯信鈔文意』、『聖典』547頁)

「唯信」という主題についてのすぐれた言(こと)を抜き出し集めたものという意である。聖覚の『唯信鈔』は抜き出した聖教の文にもとづいて聖覚の受け止めが記されている。この『歎異抄』も、歎異という仏弟子としての課題を实践するについて、すぐれた言(事)を抜き出し、集め、そしてそれを注釈するのである。その意味では、「抄」とは、単に親鸞の言葉を集めることを意味しない、親鸞のおおせにもとづいて歎異という教学の实践がなされるのである。

(3)「一通」 蓮如本では、「歎異抄一通 蓮如之」となっている。

「通」とは、手紙を数えることばとされる。「手紙・書類などを数える語。」(『広辞苑』)

	露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらうほどにこそ、 あひともなはしめたまふひとびと御不審をもうけたまは
--	--

竊かに愚案を廻らして、粗古今を勘うるに、先師の口傳之眞信に異なることを歎き、後學相續之疑惑有ることを思ふに、幸ひに有縁の知識に依らず（不）は（者）、争か易行の一門に入ることを得んや（哉）。全く自見之覺語を以て、他力之宗旨を亂ること莫かれ。	り、聖人のおほせのさふらひしおもむきをもまふしきかせまひらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義ども、おほせられあひさふうひとびとにも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはんときは、故聖人の御こゝろにあひかなひて御もちみさふう御聖教どもを、よくよく御らんさふうべし。
仍て、故親鸞聖人の御物語之趣き、耳の底に留むる所、聊か之を注す。偏へに同心行者之不審を散ぜんが爲也と。{云々}	これさらにわたくしのことばにあらずといへども、經釋のゆくちもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、<u>古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一、かたはしばかりをもおもひいでまひらせて、かきつけさふうなり。かなしきかなや、さひはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして、邊地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなふでをそめてこれをするす。なづけて「歎異抄」といふべし。外見あるべからず。</u>

（『歎異抄』『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』）

II 『歎異抄』の構成と構造的な理解について

（順不同）

- ・ 妙音院了祥の科文
- ・ 広瀬杲『歎異抄の諸問題』——蓮如書写本『歎異抄』の組織と構成

題号

序述

本文

師訓篇

異義篇

後述

付録

識語

- ・ 藤秀翠『歎異抄講讀』の分け方

三分釈（序分、正宗分、流通分）

「『歎異抄』の前十章は後八章の単なる前景ではなくして、却つて後の八章が前十章の後景と

して見るべきである。」(藤『講讃』28頁)「『鈔』のはじめの漢文の序が序分にあたる。つぎに第一章より第十八章までが正宗分である。もし前十章が後の八章の前景としてのみ存在理由が認められるならば、むしろ前十章も序分に入れるのが至当であらうが、ここでは作者のこゝろを重んじて前十章も正宗分と見る。否、正宗分の中でも殊に大切な部分として取り扱ふのである。最後に「右條々は、……」以下『鈔』の終りまでの總結の文は、まさしく流通分であつて、「先師口伝の真信」を普く天下後世に流通し伝承せしめんがための血涙の文字である。」(藤『講讃』29頁)

・金子大榮『歎異抄聞思録』の分け方

『教行信証』に序分が三つある。

師訓の巻・領解の巻

師訓篇・歎異篇・伝統篇〔述懐篇〕。

『歎異抄』「組織」(岩波文庫、1931年)

序

親鸞の語録 第九章まで、

序 第十章

唯円の歎異 第十一章以下第十八章まで

結―述懐

・近角常観『歎異抄愚註』

前後照応歎異抄 序と第十章、第九章と第十九章を対応させる。

・曾我量深『歎異抄聴記』の分け方

「『歎異抄』の組織をみると、だいたい前後二編になる。前編は、「竊回愚案」より第十条の「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおほせそうらいき」までが前編あるいは第一編である。そうして「そもそもかの御在生のむかし」より終わりまで第二編あるいは後編である。…「右条々はみなもって信心のことなるよりおこりそうろうか」といって、それから異義八か条の根本をあきらかにして、その歎異精神を強調しているのが第十九条であると思う。

・佐藤正英『歎異抄論註』——「第二章 原形復元の試み」

・加来案

題号 題号

序分 序述(序) (ここだけが漢文で書かれている)

正宗分 本文 (それぞれの章に一から十八まで連番が振られる。またそれぞれの章のなかには改行はない。)

第一章

…中略…

第十章

第十一章

…中略…

第十八章

流通分 後述（跋） 改行がある。番号が振られていない。
（二葉分の白紙がある。）

付録 流罪記録

写誌 蓮如奥書

・この講座での歎異抄の構成と名称

漢文で記された部分を序述と呼ぶ。（漢文は師訓十章の序というよりも、「歎異抄」という題号の説明を示しているのではないか）。

正宗分の18の段落を本文として理解する。本文の一つ書きの一つ一つは「第～章」と呼ぶ。「条」は、第十一章から第十八章に説かれる異義を数える語とする。

第一章から第十章までは、一応、「〔垂〕師訓篇」と呼ぶ。第十章を師訓と異義篇の序という部分に分けて理解しない。

第十一章から第十八章までは歎異篇ではなく「〔誠〕異義篇と」呼ぶ。（「歎異」は一通をつらぬく関心であるから）

流通分は跋もしくは後述と呼ぶ。